

消費者行動 (1) 消費者余剰最大化仮説 *

消費者行動

消費者 - (目的) 効用最大化 (手段) 消費 (数量, 品目) (制約) 予算制約
 消費者行動を別の観点 (消費者余剰最大化仮説) で考えてみる

支払用意 (総支払用意 Total Willingness to pay, TW)

支払用意 = ある消費量に対して支払っても良いと考える最高額 cf. サービス・フロー
 満足度が高いほど, 支払用意も高くなる (予算制約にも依存する)

例) ステーキの支払用意

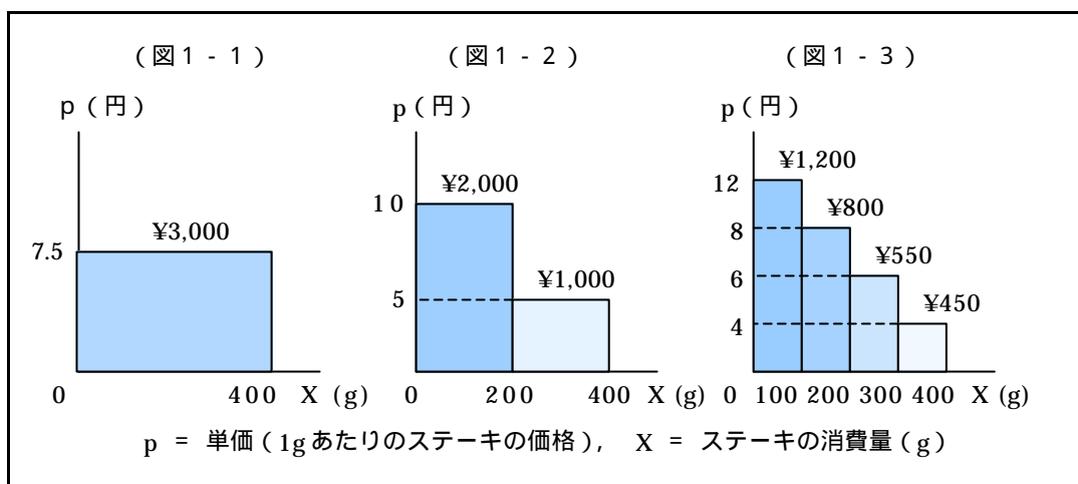
A さん - ステーキ 400g に対する総支払用意 = 3000 円

ステーキ 400g のうち, 最初に消費する (食べる) 200g と, あとから消費する 200g では, 最初に消費する 200g のステーキの方が満足度が高い (と考えられる). <図 1 - 2 >

同様に, ステーキ 200g のうち, はじめに消費する 100g と, あとから消費する 100g では, 最初に消費する 100g のステーキの方が満足度が高い (と考えられる). <図 1 - 3 >

同様なことを繰り返していくと, 最終的に, グラフの頂点を結んだものは右下がりの曲線として (近似的に) 記述できる. <図 2 - 1 >

限界支払用意曲線 : 限界支払用意逓減の法則 (「限界効用逓減の法則」)



消費者余剰 Consumer Surplus, CS

$$\text{消費者余剰} = \text{総支払用意} - \text{実支払 (実際に支払った金額, 代金)}$$

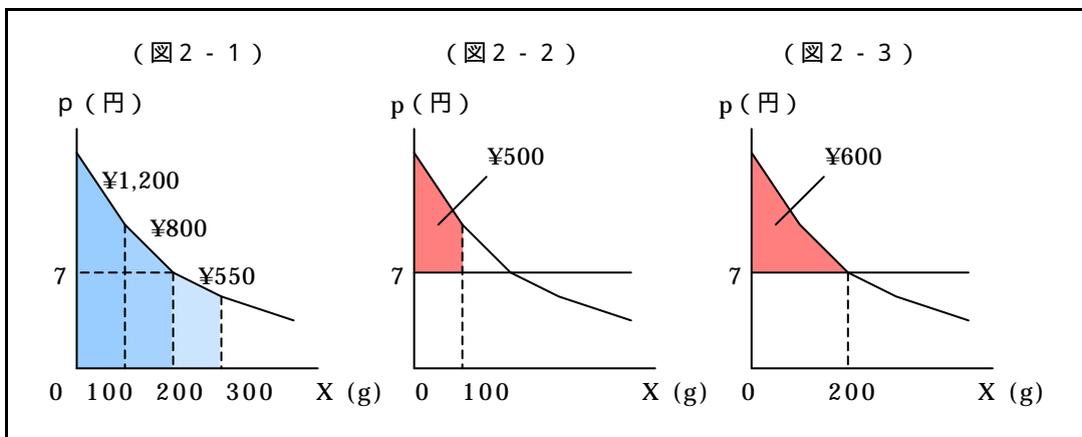
例) ステーキ単価 7 円 (1 グラムあたり 7 円 = 100g あたり 700 円)

(1) ステーキ 100g の消費

$$\text{消費者余剰} = 1200 - 700 = 500 \text{ (円)} \quad \text{< 図 2 - 2 >}$$

(2) ステーキ 200g の消費

$$\text{消費者余剰} = 2000 - 1400 = 600 \text{ (円)} \quad \text{< 図 2 - 3 >}$$



消費者余剰を最大にする消費量は、価格線 ($p=7$) が限界支払用意曲線と交わるときの消費量に等しい。(需要曲線と同じ性質)

$$\text{(個人の) 限界支払用意曲線} = \text{個人の需要曲線} \quad \text{cf. 市場の需要曲線}$$

【問題 1】

ステーキ 300g の消費は、ステーキ 200g の消費に比べ、消費者余剰が小さいことを示せ。最適消費 (ステーキ 200g) を選択したら、お店の人が「おまけ」で 100g 余分にステーキをつけてくれた。このときの消費者余剰を計算せよ。

お店が「300g ステーキ, 2000 円」(100g あたり約 666 円) というお得メニュー (割引) をはじめた。このメニューは、上記の消費者 (A さん) にとって、お得か否か? 説明せよ。

参考文献

- ・ 矢野 誠 (2001) 『ミクロ経済学の基礎』, 第 2 章「消費者の行動」, 岩波書店。
- ・ 矢野 誠 (2001) 『ミクロ経済学の応用』, 第 1 章「ミクロ経済学の基礎知識」, 岩波書店。